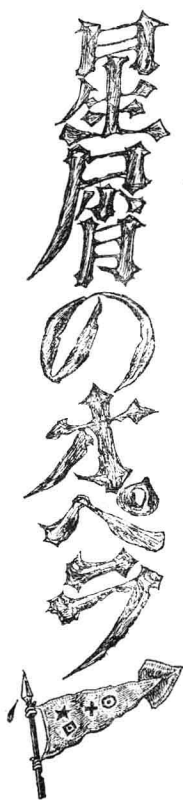


星屑のオペラ

山口泉



山口泉コレクション



径書房

著者略歴

山口 泉（やまぐち いずみ）

1955年7月28日、長野県に生まれる。1977年、『夜よ 天使を受胎せよ』で、第13回太宰治賞・優秀作。東京芸術大学美術学部芸術学科中退。著書、『吹雪の星の子どもたち』（径書房）、『旅する人びとの国』（筑摩書房）を刊行。

星屑のオペラ

一九八五年一月三十一日発行

定価 一七〇〇円

著者 © 山口 泉

発行者 原田奈翁雄

発行所 株式会社径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二―一三―五 影山ビル

電話 〇三―二三四―四六〇八（編集）

〇三―二六三―七〇一九（営業）

振替口座 東京 一―三三二―二六

印刷 明和印刷株式会社

京美印刷株式会社

製本 株式会社 積信堂

山口泉コレクション
星屑のオペラ

目次

第Ⅰ夜 記憶・来歴・今夜という現在

小説 死ねない囚人 12

エッセイ “希望”の根拠をめぐる一考察 24

詩 焚火について 39

日記 経験の野（一） 46

第Ⅱ夜 集団・禁忌・国家

小説 銀河槍騎兵ノルダ・ルーモ 50

エッセイ UFOを見ない人 56

日記 経験の野（二） 62

書簡 世界の終わりまで、たった一人でおまえに——（第一の手紙） 64

第Ⅲ夜 “知”・“記号”・“体系”

小説 黄昏の国 70

エッセイ 不死の若者 78

日記 経験の野（三） 85

ノート 水鳥のいる公園 88

第Ⅳ夜 性・身体・他者

小説 エケトロス倫理学・残闕^{ざんけつ} 96

エッセイ ファシズムとしての性教育 107

日記 経験の野（四） 137

書評 『ナ・ゼ？ ナ・ゼ・デ・ス・カ……』を読む 139

詩 春に関して私がいえる二、三のこと 150

第Ⅴ夜 光・途上・彼方へ――

日記 経験の野（五） 156

書簡 世界の終わりまで、たった一人でいるおまえに――（第二の手紙） 159

詩 超詩・真実の似姿 164

言葉 おまえの・彼方の・諸国へ 171

初出一覧 200

図版一覧 202

後記 204

言葉・絵画・写真・企画・構成・装本

山口泉

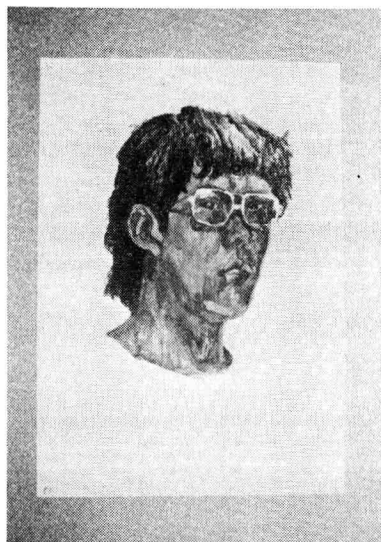
星屑のオペラ

1980—1984









星屑のオペラ

急に

第Ⅰ夜
記憶・来歴・今夜という現在



小説 死ねない囚人

(一) 国・その来歴

稀代の専制君主にして恐怖政治の執行者——袖口のすばまった緑のビロードの服をつけた秘密警察官たちと、軍楽隊と、彼らのかなでる春の祝典讃歌と、二百八十人の宮廷詩人たちと、六千人の暗殺部隊と、夏と冬とにくりかえされる、その起源も方法さえもあきらかでない王権神授説追認の儀式と、美しく無能な少年少女を国じゅうから選抜して始められる、九十五日間にわたる猥褻な競技会と、その周囲に神父と礼装した貴婦人たちのための見物席がしつらえられてある、青酸ガスを充滿させるガラス貼りの清潔な処刑室と、化粧のへたな映画女優たちと、蓄膿症の哲学者たちと、印刷の稚拙な宝くじと、材質の粗悪な色鉛筆と、電波と、煤けた鳥たちと、そしてこの国土に常にぬきがたくある貧しさと民の卑しさによって守られた、稀代の専制君主にして、《生爪の塔》監獄——あの政治犯収容所を、さながら肉屋の仕事場裏に似たものに変えると伝えられている、そうした恐怖政治の執行者・大昆布^{クツブス}一世の統治は、すでに四

十年の長きにわたってつづいていた。

いや、人によっては、その治世の始まったのは前の世紀の中ごろだとも、またそのさらに前の世紀の後葉だとも、さまざまに意見が分れている。しかしながら、そのほんとうのところは、いまとなつてはおそらく誰にも解らないにちがいない。なぜなら、その種の事実の確認については、何よりも厳密で公正な歴史学者と歴史書の助けをかりなければならぬのは言をまたないが、大昆布クツサス一世の考えでは、およそこの世で公正な歴史学者と厳密な歴史書ほど、なんの役にもたたない、始末におえないものではなく、したがってわが国最後の歴史書は、ざっと十五年ほどまえ、それを筆写するものもないまま、秘密警察の俗悪文献収蔵庫で紙魚しめと鼠と天井裏からしたりおちる雨だれの犠牲となつて潰つぶえ、いっぽうわが国最後の歴史学者は、ざっと二十二年ほどまえ、《生爪の塔》監獄の前庭で、王みずからの考案になるところの刑罰——すなわち、剝はりぬかれた頭蓋のなかに硫酸をそそぎこむという刑罰により、死亡していたからである。それでは、もはやわが国には、かの権勢強大にして国土と国民のすべてを春の鯨にしんのごとくに蕩尽とうじんしてゆく王に、あえて抗おうとする者は一人もいなかったか？ わが国百二十万の国民は、ひとりのこらず、この残忍で兇悪、理不尽な王の支配に屈服していたということになるのか？ いや、そうではない。そうでは、なかったのである。

(二) 抵抗・その現場

かつては地下墓所^{カタココンベ}につかわれていたという、その階下の広大な講堂には、いま夥しい人びとが集^{あつ}っていた。漆喰^{ヌグ}で罅^{ひび}をぬりかためた壁のあちこちから、しかもなおすかに地下水が漏れていて、それはそこが軍や秘密警察やそのほかもの、王権を助成するためのいっさいの地上組織から離れた場所であることを、たえまなく人びとに思いださせる役割りをはたしていた。

議長が入ってくるまでのあいだ、人びとの上を、常にもまして一種の昂奮が支配していた。

この国の徳と叡智を代表する最後の思想家・赤目鰯^{アカメワシ}アントン氏の生命に、いままた何千回めかの危機がおとずれようとしていたからである。講堂のあちこちから、周囲をはばかりうなひそひそ声で、あるいは声高に威丈高な調子で、その問題について論じあう人びとの言葉がたちのぼっていた。かの《生爪の塔》監獄の中央監房の最上階、天頂にむかつて突きつけられた嘴^{くちばし}のような独房に、かの稀代の専制君主にして恐怖政治の執行者・大昆布^{クツサス}一世の命により、ほとんどその王の在位とおなじほどの時間にわたって幽閉されつづけている、かの、この国の徳と叡智を代表する最後の思想家・赤目鰯^{アカメワシ}アントン氏の身にせまった危険は、今回こそ樂觀しがた^{グツサス}いものに思われた。いよいよ、ほんとうにいよいよ、大昆布^{クツサス}一世みずから、赤目鰯^{アカメワシ}アントン氏の極刑執行令状に御璽^{ぎじ}を捺すかもしれないという情報^{グツサス}が、どこからともなしにもたらされてい